

# 金沢

## かわら版

18

### 尾張町しこせ通りで

商人の町・尾張町は、いち早く情報を得ることに努めてお客様の満足を先取りすることに力をつけては、今も昔も変わらない。例えば江戸時代においては、

「江戸三度京三度」といわれる加賀藩独自の飛脚制度が利用されていた。三度というのには、月に三度江戸と京都を行き来していたことを指す。

### 情報収集

最初は、関所を勝の全面的信頼の下に運ぶため、足輕が任に当たっていた。やがて、商人数人の株立になって尾張町で營業を開始するようになる。この飛脚制度は特に早く機能し始めたのが。

仕事の内幕は、公の手紙とか小伝を持って走っていたが、同時に江戸の將軍、京都の天皇の情報を伝える役目もあった。

こうした情報の取り次ぎという藩政にとって大事なことを、民間の尾張町商人に任せていたことには驚く。尾張藩士で用向きを賜っていた者たちへの、なみなみならぬ前田家の配達の一片を感じさせられる。

民俗学の柳田國男「東国古道記」の中に、「加賀様の隠し

が急ぎ取りつぎきれなかったことが、大きな原因だった。加賀藩としては以後こうしたことのないよう、江戸の情勢を一刻も早く、ひそかに入手するためには隠し道を開発したようだ。また一朝事ある時は、素早く江戸の人質を金沢に逃げ帰すために

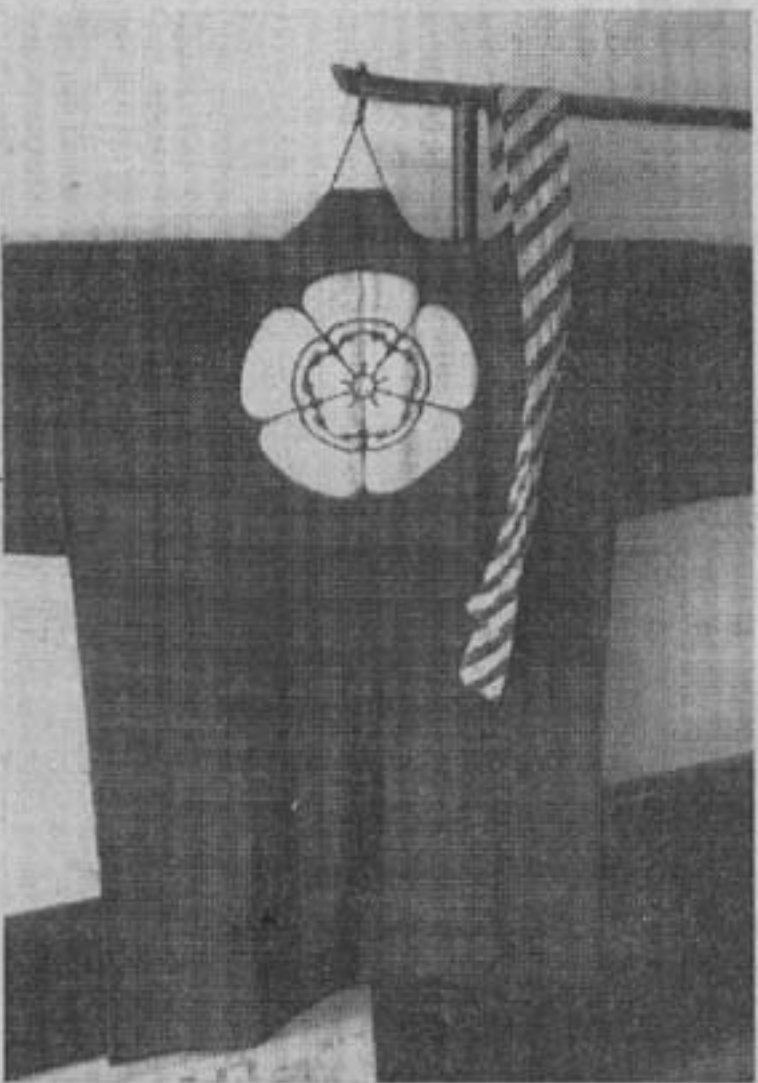
## 藩独特の飛脚制 商人が取り次ぎ

道筋は十石峠から佐久高原、小津の近くの幸月、別所温泉、大町、黒部に至るもの。そしてこの近辺には、藩の隠し飛脚と推測される郵指(えさし)が、とりもちを付けた長い棒を持って表向き(たか)の郵になる小鳥を採しながら情報を持っていった。

飛脚が来ると情報のバトンを手を行い、郵指は何食わぬ顔で江戸三度京三度の取次所のある尾張町にやってくるという段取り。

情報の重要さと、尾張町商人と加賀藩のかかわりにロマンを覚えさせられる。

(江戸 珠一＝尾張町若手合)



はんでん

紋の入ったはんでんを着て腰ひもをきりりと結ぶと、商人の「正装」に。情報にこたえようとどんなに気を使ったことが